

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Research Project on the Endangered Dialects of Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 真田, 信治 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001919

日本における危機に瀕した方言の研究課題

真田 信治

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 1 はじめに | 3.4 特徴的音声の集大成 |
| 2 言語か言語変種か | 3.5 アクセントの総合的記述 |
| 3 方言の実態と研究の現状 | 3.6 文法・表現法の総合的記述 |
| 3.1 各地方言の総合記述について | 3.7 方言のテキスト(教材)作成の
試み |
| 3.2 個人語彙の完全記述について | |
| 3.3 俚言の集大成 | 4 おわりに |

1 はじめに

ここでは、消滅の危機に瀕した人類言語をめぐる本研究プロジェクトにおける、日本語を対象とした研究の課題について述べたい。

日本語の場合、そこにはあくまで言語変種間の闘争があるのであって、日本語という言語が消滅するわけではない。しかし、言語変種としての伝統(純粋)方言の記述調査は、掛け値なしで、ここ数年が勝負となる、と筆者は考えている。

筆者は現在、宮岡伯人先生が領域代表である科学研究費特定領域研究「環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究」の中の日本語研究班を組織し、「消滅に瀕した日本語方言に関する総合的研究」を課題とした調査研究に従事している。この研究では、伝統方言が消滅の危機に瀕している地域を重要地点として、これまでに蓄積されてきたその方言の資料を言語変化の観点から総合的に見直すとともに、いままで埋もれていた資料を公開できる形に整理する、また当該地域で詳細なフィールドワークを行い、その実態を確実に記録、記述することを目的としている。

欧米の学界で、言語の「絶滅」の危機が叫ばれ、「危機言語」(endangered languages)を対象とした研究が盛んになったのは、1990年代に入ってからである。日本でも、この時期以降、各地で方言回帰への動きが特に目立つようになった。方言が市民権を獲得し、90年代の後半からは、メディアでも、また行政のレベルにおいても、サブカルチャーとしての方言の推奨が謳われはじめている。

明治以降、日本語はひたすら均質化される方向に進んできたのであった。方言撲滅をめざす国語教育、標準語運動がその典型である。そして、この均質化は80年代のテレビメディア爛熟期に、ほぼ完成の域に達したと言っていい。しかし、均質化の完成と同時

に、ことばの新たな多様化の時代がはじまった。そして、逆に方言を惜しむ声が各地で出はじめたのである。近代的なコミュニケーションのために、かつて方言はいわば障害物とされ、切り開くべきジャングルであったが、その自然を開拓し征服したとき、人々は、はじめて失ったものの大きいことに気づいた。そして、滅びつつある自然と同じように方言を大切に保存しようという時代になったわけである。

2 言語か言語変種か

日本語は消滅に瀕した言語ではない。したがって日本語は「危機言語」の対象にならないのではないかと、といった議論がある。しかし、言語か方言かは政治的に決まるのである。琉球王国が存続していれば、沖縄方言は、琉球語というれっきとした言語としてあったであろう。また、たとえば東北民国や北海道共和国などが成立していれば、東北語、北海道語という言語が認知されているであろう。上のように主張する人は、明治以来の国民統一的な精神支配に冒されているのだと言うべきである。

日本の場合、(ここではもちろんアイヌ語やコリア語をのぞいているが、)あくまで言語変種間の闘争である。そこには言語事象同士の闘争もあるが、地域の方言体系と標準語との闘争、あるいは方言体系同士の闘争がある。体系のぶつかりではあるが、それはいわば日本語自体の変容にかかわることで、たしかに日本語そのものが消滅していくわけではない。日本語は「危機言語」の対象ではない、という議論の中に、日本語方言の消滅はどうでもいいということではなく、絶滅の危機に瀕して喘いでいる世界の多くの少数言語のことを考えれば、できるならば、まずはそちらの調査の方に予算をたくさん付けるべきである、日本語方言の場合と天秤にかけて、という気持ちがあるのだとすれば、納得できる話ではある。批判は、天秤にかけての話、いわばお金にかかわることであると理解したい。日本語方言の消滅について、それはどうでもいいことだと考える人は1人もいないと信じたいものである。

3 方言の実態と研究の現状

上に述べたように、方言が消えていく前にきちんとした記録を残す、ということが大切ということで、プロジェクトを進行させているわけであるが、実は本当に純粋方言というものが存在するのかわからないのである。しかしながら、少なくとも今までの教科書に載せられていたような伝統的方言を確実に記述することができるのは、私の経験でもやはり明治生まれの人が最後のよな気がするのである。大正生まれになると大分変形してくるようになる。たとえば、北陸の富山での調査データで見ると、

沿岸部や平野部の山間よりの地域における、中舌の母音、いわゆるズーズー弁的要素は、もう本当に明治の生まれではないと聞かれないということがある（真田 2001）。その点では、まさにここ数年が最後の勝負なのである。

また、たとえば八丈島方言、この方言ではもうわずかな余裕さえ残されていないほどに深刻である。中年層以上の世代をのぞけば、わずかな方言語彙、わずかな方言語法を知識として持つだけで、話せないどころか聞き取りもできない、といった状況にある。中高年層でさえ、地区によっては標準語による浸食が著しく、体系的な伝統方言の所有者はすでにまれな状態で、これまでかろうじて保たれてきた独自の体系が、ほぼ完全に標準語の体系に置き換わり、まさに絶滅しようとしている。若年層ではわずかな地域差さえも感じられないほどに標準語化が進んでいる（金田 2001）。

かつて、いまは亡き徳川宗賢先生が、方言の記録の重要性を説いて、「文献による中央日本語史研究は後世でも可能である。したがってそれは先送りしてもいい。いまはともかく古文献をひもとく手を一時休めて、この列島から消えつつある方言の収集に日本語研究者のすべてがかかわるべきではないか。」と、おっしゃっていたことを思い出す。

以下、それぞれのレベルにおける研究の現状を見通すことにしたい。そして、今度の「危機言語」研究のプロジェクトがその中にどのように位置づけられるかという点について解説したいと思う。

3.1 各地方言の総合記述について

まず、各地の伝統方言の記述についてであるが、日本語方言の一応の区画に基づいて、それぞれの方言のアウトライン、サマリーはいろんな形で報告されてはいるが、もっとも多く地点を対象としたものは、『現代日本語方言大辞典』（全9巻、明治書院、1992-1994）である。これは基礎語彙的な項目（2,300）について、全国72地点で行われた隣地調査の結果を集大成したものである。その第1巻に、各都道府県にわたる（沖縄県の場合は4地点）、当該方言のアクセント、音韻、文法、語彙に関する概観が記載されている。それぞれはまだかなり粗いものではあるが、ここに一応、統一された形での各地方言の簡略記述が存在するのである。もちろん、これはあくまでサマリーであって、「方言の記述」というにはほど遠いものであることも事実である。追究すべき事象はまだまだ山ほどあるわけである。徹底した本格的な総合記述という点から見れば、日本語方言を対象とした研究は実は少ないのである。

そのような中になって、特筆すべき業績は、山浦玄嗣氏による『ケセン語大辞典』（上・下、無明舎出版、2000）である。対象は、岩手県南部、気仙地方の方言である。

筆者は、これは世界に誇れる、総合記述のモデルとなるものであると評価するものである。1地方言を対象として、例文を含む教科書と文法書、そして辞書を備えたものと

しては最大級のものである。方言というと山浦氏には気に食わないかもしれない。山浦氏は、ケセン語を日本の方言としてではなく、ひとつの独立した言語としてとらえ、その各ジャンル（文字・音韻・音調・文法・語彙・用例）を統一して総合的に記述したのである。辞書では、収録した34,000の語彙すべてに、その語彙が実際に用いられるさまざまな意味合いや場面を想定した豊富な用例を添えられている。「方言ではなく、日本語ともアラビア語ともフランス語とも対等」の一言語であるとの自負から、34,000語には「日本語にもある」ことばも含まれる。山浦氏は開業医であるが、診察室に日々やってくる地元の患者とのやりとりから採集した用例も多い。表記は、独自に編み出したケセン語正書法（ケセン式ローマ字）を用いて音韻、アクセントを明記し、用言の語幹末子音を明示している。そして、ケセン語を全く知らない人も学習が可能なような配慮がなされている。

本当は、このようなものが各地で出てくるべきなのである。しかし、それは、もちろんすぐにできるものではない。山浦氏にしても、これはもう20年以上の歳月をかけての仕事なわけである。この研究をモデルとして、それぞれが、生涯の仕事として取り組む、そのような人々の存在が必要である。そのような人々を養成することが、そのような体制づくりがわれわれに求められていよう。

さて、この辞書の語彙数は34,000という大変に膨大なもので、そこには「日本語にもある」ことばも含まれているというわけであるが、たとえば、キジュン（基準）とかコーアツ（高圧）などという語が収録されている。それがケセンの正書法で、ローマ字で示されているわけである。そこで筆者が若干気になるのは、筆者自身の経験上のことなのであるが、語彙には、その使用における層があると考えることにかかわる点である。ここでのキジュン（基準）とかコーアツ（高圧）ということばは、本当にケセンという地域社会において基底層としてあるものなのかということである。そこにはいろんな雑多なものも混じり込んでいるのではないか。患者が、病院の医師の前なので、少しフォーマルなことばづかいをした、ということもあるのではないか。患者の口から出たことばだからとして、そのすべてがケセン語と言えるのか。「耳で聞いてないことばはないし、すべてアクセント記号を付けてある。生きていることばだけを集めた」と山浦氏は言うが、語彙の層別のことを考えると、そこは少し気になるところではある。直接に批判するわけではないが、このことは音韻や文法の体系と同様に語彙の体系というものを考えるときの方法論として、確認しておきたい点である。

以下、そのような観点から、個人語彙（イディオレクト）の完全記述ということについて検討してみよう。

3.2 個人語彙の完全記述について

個人語彙に関しては、安定した語彙と浮動的な語彙とがあると考える。そもそも地域社会には二つ、あるいは三つ（以上）の言語層があることが指摘される。そのひとつは、基底層というべき、vernacular に属する語彙である。これは、地域社会において最初に学ぶ言語である。これに対して、その上層部というべき、公的、基準的な言語がある。日本列島で言えば、東京語を基盤として発達した共通語がそれである。

基底層の言語は、いったん習得されたあとは、個人において忘れられる部分はあっても、さらに付け加わるとか、それ自体が変化することは少ない。それに対して上層部は絶えず浮動している。なお、柴田武先生によれば、沖縄・宮古島平良の場合、上層部に第1と第2があり、第1上層部は首里を中心とする琉球語であり、第2上層部は東京を中心とする「日本語標準語」であると言う（柴田 1988）。

このような言語層のうち、方言の語彙体系の記述は、まずは基底層から始めるべきであろう。ある程度の年齢を重ねたインフォーマントからは、その基底層は内省報告として報告されるはずのものである。基底層には安定した観察しやすい対象と考えられる。

以上のような観点から、筆者が、富山県西南部の五箇山郷で1924年生まれの1女性を対象に継続してきた調査の結果では、基底層の部分は、どうも1万語を超えないのではないかと思うのである。そのような次第で、ケセンの場合の34,000語という数に気がなったというわけである。ただ、この1万語を超えないという点は、一般化できるものかどうかは自信がないのである。基底層というものが vernacular に属する語彙であって、それは学校に入ってから学ぶ学習語彙とは異なるレベルのものというふうに言っても、問題は、そういうものが明確に記述できるものかどうかということである。一般には、そういうことをきっちりと内省できる人は実はあまりいないのではないか。そもそも、これは学校に入ってから習ったことば、これは本来の生活の場でのことば、と弁別して内省できるものなのかどうかという方法論的なことがある。ただ、シャープなインフォーマントであれば、それができるのではないか、という思いもまた一方で筆者にはある。

ところで、柴田先生は宮古方言の記述の課程で、「宮古方言は、日本標準語と著しく異なるために、同形、同義の方言はほとんどない。ここでの記述は、迷うことなく、すべての語を記述していけばいいのである。」と述べていらっしゃる。しかし、たとえば東北方言や九州方言のように、音韻体系が標準語とかなり異なるところでは、その近代的語彙が方言のフィルターを経ているかどうかで、借用語か標準語のままかの判定をするという言語学的手法を使いたくなる。ところが、東北の人々が標準語を話すときにも、東北訛が抜けないとすれば、この判定も意味がなくなるのではないか。たとえば、方言のフィルターによって変形して、「基準」という語が「チジュン」となっていたと

して、それをもって方言の語彙と言えるのかどうかという問題である。ここでも頼りはインフォーマントの内省なのである。

さて、記述の対象をイディオレクトにしぼるという観点について検討しよう。たとえば、AさんとBさんの2人の語彙を比較したとき、その個人差は極めて大きいことが分かる。そのことは、特に固有名詞のことを考えれば容易に理解できよう。たとえば地名である。地名も語彙である。所有地名には個人間に共通するものもあるが、大部分はお互いに相違している。したがって、1個人のもっている地名語彙を記述することはできてもAさんとBさんにCさんが、さらにDさんが加わった場合に、それら個人の集合としての地名語彙を完全記述するという事は困難なのではないか。原理的には、やはり1人の頭の中にあるものをきっちりと記述した上においてはじめて、語彙の拮抗状況、いわばその体系といったものが見えてくるのではないかと思うのである。そのような立場で、筆者は、1973年以来、もう25年以上になるが、個人の基底層における語彙の調査を継続しているわけである（真田・真田 1973-1998）。

いまインフォーマントの持つ微細地名（どのような地図にも載せられていない地名）語彙について見れば、生育地（東礪波郡上平村真木集落）の周囲に濃く分布し、遠くなるにつれて徐々に薄くなるような分布模様を示している（図1）。

対象を個人語彙にしぼるという観点がここからも出て来ざるを得ないのである。たとえばBさんだとこの分布模様は少し違うであろうし、またCさんだとさらに大幅に違うであろう。そこで、1人のインフォーマントに少女時代の記憶を辿りながら1語1語を思い浮かべ報告してもらって書き留めるということをやってきたのである。ただし、最近では実は頓挫しているのである。それは一つにはインフォーマントが病気で、記述に絶えられなくなったということもあるが、方法論上のナイーブな悩みが生じつつあるからである。それは記憶の合理化ということにかかわる。たとえば、われわれは、辿ってきた真っ直ぐな道を振り返り、その道の始発点を遠くに見ると、それはまさに点のように見える。しかしながら、そこに戻ればそこはやはり点ではなくて、同じ幅の道があるだけである。人生における少女時代を振り返った場合においても、同じような錯覚が生じるのではなからうか。きれいな体系が存在する（した）ように思えるのは、ひょっとして、合理化の結果なのではなからうか、といった反省である。きれいに見えるものほど怪しいものなのではないか、とする懐疑の心が自分のなかに生じつつあることも事実なのである。

3.3 俚言の集大成

ケセン語の辞書や上の個人語彙の記述においては、当然、それが東京標準語と同形、同義であっても、それがその土地の方言である限り記述の対象になるわけだが、各地の

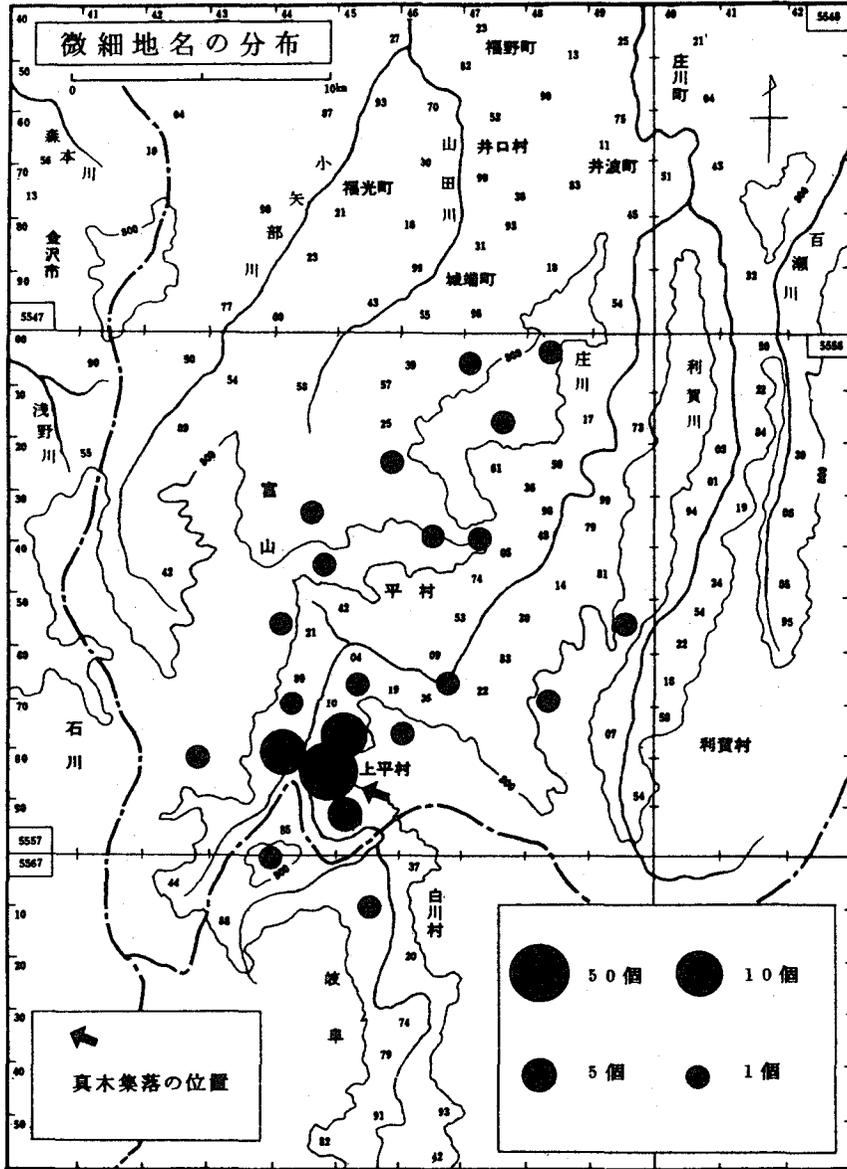


図1 インフォーマントの持つ微細地名語彙

方言語形を対象とした、従来のいわゆる方言集、俚言集においては、東京標準語と音韻形式および意味が同じものは除くのが慣例である。

日本における方言集は枚挙にいとまのないくらい多くのものが存在する。

江戸時代以降の各種の方言集に載せられている方言形式を拾い上げ、それを網羅したものが、実はできている『日本方言大辞典』（全3巻、小学館、1989）である。これは、方言集を切り刻んで、それを集大成したもので、まさに網羅とっていいものである。

筆者自身の経験で言えば、日本のどこかでの、ある表現形を聞いて、それをこの辞典で調べてまったく手がかりがなかったことはないと言っても過言ではない。もし、若者語的に語形や意味が変化しているとか、あるいは消滅していく課程での拡散によって変形しているものを別とすれば、この辞書を引いて記載のまったくないものは皆無ではないか、とさえ思う。それぐらいですらあるから、日本の俚言については、すでに網羅されていると言ってもいいのではなからうか。

なお、この辞書には標準語引き索引もあり、標準語から各語に相当する方言を検索できるようにになっている。それは、辞書項目の解説文の中から、その項目にとって重要と考えられることばを抽出して、これをキーワードとし、それらに従って該当する方言を一覧できるようにまとめられたものである。しかしながら、それぞれの形式がその方言体系のなかでどのような位置を占めているのか。その、ほかの形式との張り合いの関係は分からないのである。

このたびの「危機言語」研究の日本本土・語彙班でのプロジェクトは、その点を補うことを目的に進められている。それぞれの分野語彙（挨拶表現など、言語行動項目を含む）を対象に、その部分体系の解明を目指しての、全国的な通信調査が進行中である。なお、収集された資料はデータベースとして刊行される予定である。

3.4 特徴的音声の集大成

そして、実は上に記した『日本方言大辞典』の下巻に収載されているのであるが、「方言音韻総覧」というものがある。これは上野善道氏を中心とするメンバーが作成したもので、標準語音に対照しての諸方言の特徴的な音声を、語例とともに掲げたものである。標準語音節引きの諸方言音節対応辞典で、ここに各地方言の特徴的な音声はほぼ網羅されているわけである。たとえば、「息」という語であれば、標準語の「イキ」に対応して、首里方言だと「イーチ」、それから岩手方言だと「エギ」のようになるわけで、標準語音節の「キ」に対応するものは、首里方言では「チ」であり、岩手方言では「キ」（語頭）と「ギ」（非語頭）である、という音節対応が認められる、とするのである。この「総覧」は、これを全国諸方言についてまとめ、標準語音節の見出し形（上の場合は「キ」）から、それに対応する各地方言の音節の形を引けるようになってい

ただし、「木、起きる、…」の「キ」のように琉球諸方言がそろって他の「キ」とは異なる対応を見せるものや、東北地方におけるシとスの区別のある方言などは、この「総覧」の記述の枠組みから漏れるものもある。その一部は囲み記事などの形で示されてはいるが。

いずれにしても、日本方言における特徴的な音声の集大成は、ここに存在するのである。このたびの「危機言語」研究の日本本土・音韻班でのプロジェクトは、これら特徴

的な音声を、文字ではなく、実際の音声のままに記録することを目的に進められている。各要地での収録作業が進行中である。なお、収録された資料はCD-ROMの形にまとめられる予定である。

3.5 アクセントの総合的記述

アクセントに関しては、その特徴や方言における分布について、これまでに多くの報告が存在する。『類聚名義抄』などの古辞書による記述から、平安時代後期の京都アクセント体系の概略が明らかになっていることもあって、それら辞書に収載されている語彙、いわゆる類別語彙のアクセント形とその部分アクセント体系については、諸方言の状況はほとんど解明されている。ただし、それはあくまで限定されたものであり、アクセントの全体体系が記述された方言はまだ非常に少ないのである。いままでの多くの報告は、いずれも類別語彙項目に限られたものであった。その項目以外のものについて、それぞれがどんなアクセント形をとっているのか、ということは、実はまだほとんどと言っていないくらい分かってはいないのである。

このたびの「危機言語」研究の方言アクセント班でのプロジェクトは、その点を補完することを目的に進められている。各要地において行われてきた、大量の項目を対象とした調査の結果が総合され、採集データが次々と公表されている。

3.6 文法・表現法の総合的記述

文法・表現法をめぐっては、一応、筆者がチーフとなって調査・研究を進めている。この分野においては、実は特徴的な事象に関してのスケッチは相当に存在する。しかしながら、どの事象を取り上げても、その完全記述がなされたというものは皆無に近いのである。この分野での記述研究はまだ緒についたばかりの状況にあるといっても過言ではないだろう。たとえば、アスペクト表現について、方言におけるアスペクトに関する調査だけでも、大プロジェクトが創成され、数年間かけて西日本域でのアスペクト表現にどのような範疇があるのか、その分布は、といったことが研究され、その成果が報告されて、やっと全体の輪郭が見えて来た、という段階になったのである（工藤 2001）。多数のメンバーが、長い年月を費やしてやっとこれだけなのである。文法・表現法全体の総合記述ということになると、一体どれだけの時間とエネルギーを要するかは、このことから、推して知るべしであろう。3年や4年では完全記述など絶対にできるものではないのである。そこで、とりあえずのステップとして、記述のための入り口を示したいと思うのである。学校文法的な見方ではない、新しいパラダイムによった方言調査によって、文法研究は今後あらたな展開を見せるのではないかといった予感が筆者にはある。

このたびの「危機言語」研究の方言文法・表現法班でのプロジェクトでは、まずはそのための調査表作りから始めようと考えた。初年度には熊本の天草方言を徹底的に調査して、語法に関する調査項目の一覧表を作成し、「方言文法調査項目リスト—天草篇」を公刊した。これは九州方言バージョンである。次年度には秋田の由利方言を徹底的に調査して、「方言文法調査項目リスト—由利編」を公刊する予定である。これは東北方言バージョンである。中途半端なスケッチよりも本格的な記述のために、まずは足元を固める必要がある、と考えての活動である。

3.7 方言のテキスト（教材）作成の試み

最後に、方言のテキスト、教材の作成のことについてである。たとえば琉球語の教育の場合などは、琉球大学でのカリキュラムとして組み込まれているわけであるが、本土方言に関して、生え抜きの人に方言を教育しようという取り組みは皆無なのではないか。大阪あたりだと、外国人を対象に、大阪弁の英語版とか、「モーカリマッカ」「ボチボチデンナ」とかの、いわゆる社交用語ガイドのようなものは比較の見かけるのであるが、日本人ネイティブを対象に、たとえば、高知に赴任するための土佐弁教習所などというものは多分ないわけで、それはなぜなのかということも考えるべきであるが、いずれにしても、そのための教材は存在しないと思われる。ただし、留学生など、外国の人々が、来日して、各地での生活において最も悩むことの一つは、地域のことばが分からないということである。いわゆる日本語教育の世界ではそのような地域のことばに対する取り組み、テキスト作りが、いま各地で始まっている。

筆者自身は、そのようなテキスト作成に対して、どちらかといえば足を引っぱる立場であった。たとえば、大阪弁を例にとっても、そこはまさに流動の渦中というか、変化の過程にあるわけで、対象地点をどこに定位するか、また、どの世代をターゲットにするかによって、その記述は大きく左右されるはずである。いわば正しい大阪弁というものについて、一つのゆるぎない基準があって、その運用にはっきりした公式が存在するのなら、ことは簡単である。対象地点も、船場にするのか、摂津にするのか。（船場といえば、先日NHKの大阪放送局に行った折、職員が「フナバってどこですか。」と言ったので、びっくりして、説明する気も失せたのであった。）

書きことばを背景とする標準日本語がすぐ後ろにひかえている東京語とくらべ、大阪では、いろいろな変化のインパクトがそれぞれの地域にあって、ことばの価値付け、ニュアンスなども世代によって微妙に異なっている。その難しさゆえに、筆者などはテキストを作ることを控えてきたのである。ところが、大阪YWCA日本語教師会の有志が奮起して、大阪弁を学びたい人のための聴解教材を作り始めたのである。その熱意にほだされるところがあって、筆者もその作成に関与することになった。その成果が、真

田信治監修／岡本牧子・氏原庸子・山本修著『聞いておぼえる関西（大阪）弁入門』（アルク、1998）である。

これには、カセットテープが付いている。初中級程度の日本語文法をマスターした日本語学習者を対象にしているが、大阪弁に興味のある日本人にも役に立つ教材である。この教材は教室で教師が学習者に対して使用してもいいし、学習者が自習用に使用してもいい。大阪弁での表現を多く使うことよりも、今までに知っている日本語のフレーズを大阪弁ではどのように言うのか、共通語とどこが違うのかということに重点をおき、学習者が大阪弁を聞いて相手の話していることを誤解せずに理解できることを第1の目的としている。

ここでは、その中の一部を抄出して示そう。なお、漫画はこのテキストからの引用である。

(1) 動詞の否定形

動詞（V）の否定形「Vない」を、大阪弁では「Vへん」という。この形を使って、相手を誘ったり、相手に何かを勧めたりすることもできるが、この点は共通語と同じである。

「Vへん」は動詞の種類によって、また地域や年代によって、形が少しずつ異なるが、「ない」の前の音が「e（え）段」になるのが一般である。

「書かない」 → 「書けへん」

「足りない」 → 「足れへん」

「食べない」 → 「食べへん」

注1：共通語で「ある」の否定は「ない」であるが、大阪弁では「あれへん」という。

注2：「ない」の前が1音節の場合、長音に変化する。

「見ない」 → 「めえへん」

「寝ない」 → 「ねえへん」

「しない」 → 「せえへん」

「来ない」 → 「けえへん」

漫画1



注3：「見ない」の「めえへん」は、「見えない」の意味での「めえへん」とはアクセントが異なる。

(2) 命令の表現

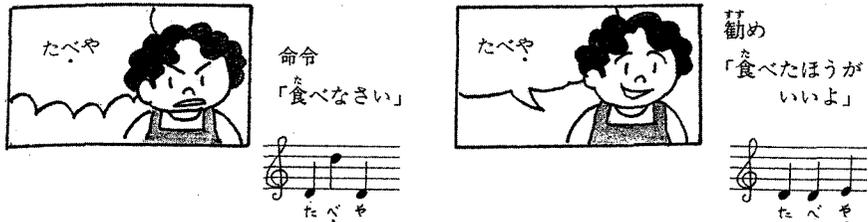
共通語の丁寧な命令形「なさい」の「なさい」をとった形が、大阪弁の命令形である。意味には、「命令」と「勧め」とがある。

「書きなさい」 → 「書き」

「食べなさい」 → 「食べ」

これには助詞の「や」や「な」が付くことがあるが、アクセントの位置によって意味が異なるので注意。

漫画2



なお、禁止命令形の作り方の基本は、次のようである。

「食べるな」 → 「食べな」

「飲むな」 → 「飲みな」

「な」は、その働きによって意味が変わるのである。その場合、アクセントが違うので注意。

漫画3



(3) やり・もらいの表現

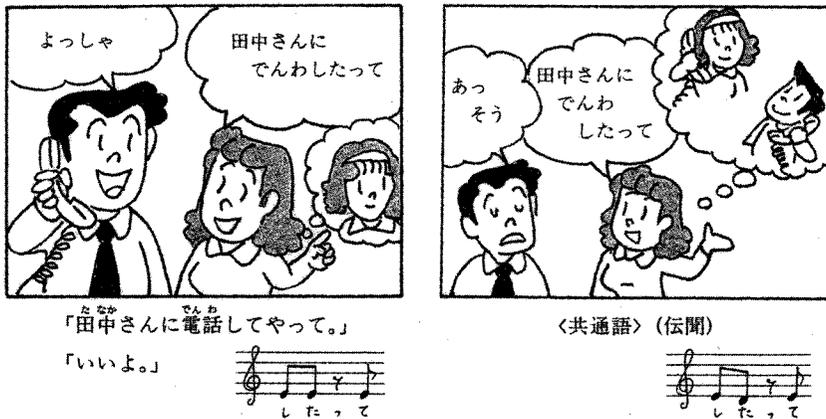
大阪弁では、共通語の「Vてあげる」は「Vたげる」, 「Vてやる」は「Vたる」, そ

して、「もらう」の過去形「もらった」を「もろた」と言う。

共通語では「Vてやる」という表現はあまり使わなくなったが、大阪弁では「Vたげる」と同じように「Vたる」も、親しい関係の人にはよく使われている。

なお、大阪弁の「Vたって」は「Vてやって(ください)」の意味であるが、共通語では「Vだそうだ」という伝聞の意味になる。それぞれはアクセントが違うので注意。

漫画4



4 おわりに

現在の「危機言語」プロジェクトの日本・本土班での計画研究の研究課題名は、次の通りである。

- ①「消滅する方言語彙の緊急調査研究」(代表者:小林隆)
- ②「消滅する方言音韻の緊急調査研究」(代表者:佐藤亮一)
- ③「消滅する方言アクセントの緊急調査研究」(代表者:上野善道)
- ④「消滅する方言文法・表現法の緊急調査研究」(代表者:真田信治)

それぞれの内容については、その概要を上で紹介した。日本が空間的な広がりを持つ限り、日本語に地域的な違いが存在するのはごく自然なことである。しかし、そのことと、それぞれの地域の伝統的方言が保たれるか、ということとはまったく別のことなのである。

方言はいま、急激に、そして確実に消滅していつている。

そのことを「危機」と認識し、そのための取り組みに意義を見いだす若い研究者の存

在が必要なのである。そのような人材を養成すること、そのための体制づくりをすることがわれわれに求められている。

文 献

金田章宏

2001 『八丈方言動詞の基礎研究』東京：笠間書院。

工藤真由美編

2001 『方言のテンス・アスペクト・ムード体系変化の総合的研究』科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書。

真田信治

2001 『百年前の越中方言』富山：桂書房。

真田信治・真田ふみ

1973-1998 『越中五箇山郷方言語彙』1-13pp. (私家版)。

柴田武

1988 『語彙論の方法』東京：三省堂。